【116】

氏　名(本　籍)	林　采震(韓　国)
学位の種類	博　士(デザイン学)
学位記番号	博甲第1039号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	美術館における展示部門の建築計画に関する基礎的研究
主　査	筑波大学教授　工学博士　栗原嘉一郎
副　査	筑波大学教授　工学博士　土肥博至
副　査	筑波大学教授　文学博士　相馬隆
副　査	筑波大学教授　下山眞司

論　文　の　要　旨

本研究は美術館の中心機能の表現である展示部門を主対象として，館の性格に見合った資料の有効活用とその計画手法の構築という観点から，現状の展示活動を考察し，美術館建築の空間構成のあり方について論究したものである。論文は7章から構成されている。

序章「研究の目的と方法」においては研究全体の枠組が示されいる。

まず研究の背景としての日本の近代美術館の形成過程について，明治期以来およそ100年を経過した日本の美術系博物館が，草創期の曲折した時代を通り抜けた後に近年一気に膨張しまた多様化してきた状況に触れ，これらのブーム的状況について，美術館としてのフィロソフィーを欠いたまま“建物”ばかりが先行しているケースも多いことを指摘し，その上で，建物に先立って示されるべき美術館のコレクションの運用方法を軸にした企画・計画的側面から建築計画のあり方を考究する立場を明らかにしている。

次いで研究の対象としての美術館について博物館全体の中で位置づけについて考察し，また本研究に関わる建築学・博物館学分野の既往研究を整理した上で本研究の位置づけを行い，具体的な研究課題を提示し，そのために行った調査の概要について述べている。

第1章「他系列の博物館との比較による美術館の展示・収蔵部門の特徴」は，次章以下で美術館の展示のあり方について論じる前段階として，既存の博物館を美術系・歴史系・自然史系・理工系に分け，展示・収蔵部門における各々の基本的な活動形態，利用特性，施設・設備特性等の比較を行ったものである。すなわち各系列ごとに，収集・収蔵活動との関係において資料属性・分類方法・取扱い方等を概観し，次に展示運営の形態と資料の活用方法・展示手法・来館利用特性等の違いを

示すとともに，これらの諸活動に対して施設的にはどのような構成特性を示しているかについて検討を加えている。この結果，美術館の展示・収蔵部門の活動は他系列の博物館と顕著な違いを見せることを検証している。

第2章「美術館における展示方法の実施形態と展覧会の構成特性」では，関東地方の全美術館を中心に，常設・企画・一般展の実施状況・推移，ならびに美術館における展覧会がこれら展示方式によってどのように構成されているかについて考察している。その結果，まず美術館急増に伴う資料借用行為の増加や展示効果を高めるための頻度の高い展示替えの実施等の理由により，常設展が漸次減少している反面，企画展・一般展は徐々に増加する傾向にあることを示している。また常設・企画・一般の三つの展示方式による展覧会の構成について，展示回数・延展示量による内訳を経営主体別に検討し，国立・都県立・市区町村立・私立によって展示方式の構成形態が大幅に異なることを見出している。

第3章「展示替えの頻度・規模からみた展示方式の性格」では，美術館における展示実態を展覧会単位の検討において明らかにしている。すなわち，三つの展示方式について，これを展示期間・展示規模の両軸からみた時の分布状況を示すとともに，1つの館が複数の展示方式を採る場合にはこれらがどのように影響し合うか，また，美術館が特定の展示方式を採択する要因は何かについても考察を加えている。その結果，常設・企画・一般の3方式の展示替え特性は著しく異なること，それらの組合せとしての展示形態には5つのタイプが存在することを示している。また，この3者の違いは基本的な展示コンセプトが異なるためだけでなく，資料固有の属性や空間条件等の要因にもよっていることを論考している。加えて，一般展については組織・機能の面から常設・企画展とは別の次元で捉えるべきことについても論考を加えている。

第4章「展示方式による館の類型化」においては，前章の結果を受けて，展示方式の構成による美術館としての類型化が試みられている。すなわち，展示替えの頻度・コレクションの展示使用形態等の指標を用いて自称による展示方式についてその実態を再検討し，これらを内容的に吟味した結果をもとにして，美術館としての類型化を提示している。すなわち固定展示型・館蔵品活用型・借用品企画型総合型の4類型である。併せてこの4類型を用いて例えば近年固定展示型が激減してきた反面，借用品企画型・館蔵品活用型など展示内容に新鮮さを与えようとする傾向が持続的に増加してきたと指摘するなど，美術館の年代別推移や施設の形態・規模，展覧会の構成形態等における差異等を明確な形で提示する作業を通してこの類型化の有効性を示している。

第5章「展示方式における展示手法の種類と特性」では，各展示方式が展示手法の点でどのような特徴を持つかを検証している。すなわち展示手法を示す指標として，博物館学・建築学の両分野から，「資料の配列・構成方式」，「情報の伝達方法」「展示装置の形態」の3項目を抽出し，それぞれについて，それを構成するいくつかのカテゴリーに対する採用率（実施率）の分布をプロフィールとして示す手法を案出し，これを先の美術館の4類型別に描いてみせることにより，4類型によって展示手法の様相がかなり異なることを明らかにしている。

第6章「資料の取扱いからみた作品のジャンルの特性」では，展示資料の作品ジャンルとその取

扱い方の関係を考察している。すなわち資料の保存方法や演出形式の特性を把握した上で，展示部門の施設計画に対して有効なジャンルの分類を行っている。具体的には，第一に，資料の収蔵・管理等の保存の面から主に作品の素材や収納形式・空調条件等の取扱い上の特性を整理し，第二に，展示手法に関する尺度として資料の形状や企画・演出上の留意事項等の面でどのような資料群が類似した特徴を持つかを考究している。その結果，作品種別によって，前者においては温湿度条件や照明条件に，後者においては展示背景の性格，展示室の構造，展示室のプロポーション・スケール等に対して，求められる条件が異なっていることを明らかにしている。これらを総合的に考察した結果，資料ジャンルを５つに分類することが有効であるとし，併せて各ジャンルについて作品の配列密度の分布を示している。

第７章「展示部門における計画的指標と計画手法への展開」は本論文の総括であり，これまでの論考の中で扱われてきた美術館の展示部門の計画に関わる主要な項目について，計画論の立場からの整理が行われ，同じ立場からの著者としての提言ないし示唆が提示されている。すなわち，美術館の展示部門の計画に当っては，館が持つべき基本的な性格にもとづく固有の諸条件に適合した計画手法が採られるべきであるとの立場から，１）展示方式（常設展示・企画展示・一般展示）の選択・組合せによる展示運営形態の設定，２）選択した展示方式と所蔵資料の性格・量・活用方針との関係による館類型（固定展示型・館蔵品活用型・借用品企画型・総合型）の設定，３）上記館類型に対応した展示手法の選定，４）作品ジャンルによる保存・管理・展示演出面でのより詳細な技法の策定，の順序で計画を進めることが可能であり有効であるとした上で，それぞれの局面における計画上の指針・手法について，計画指標との関連において論考し提言を行っている。

審　査　の　要　旨

わが国は現在空前の美術館建設ブームのさ中にある。しかしながらこのブームは必ずしも内容をともなっているとはいえず，コレクションの収集方針自体が不明確であったり，収集量が少量に過ぎたり，展示方針に理念の欠如が見られたりするケースが数多く見受けられる。すなわち設立理念があいまいなまま建物ばかりが先行しているケースが多いといってよい。他方美術館に対する社会的ニーズも多様化し，従来の通常の美術館イメージをはみ出すような運用形態や利用のタイプも出現している。

こうした状況に対して著者は一貫して，美術館の基本姿勢は資料の収蔵・展示の一元的把握に立った上での展示行為の展開のありようの中に表されるべきものとの視座に立ち，この視座から既存の数多い美術館の展示の状況に対して詳細な調査研究をくりひろげている。その結果，常設・企画・一般の３展示方式を軸にした分析を経て美術の類型化に到達し，各類型に対応した展示手法のあり方を提示するに至っている。

この成果の意義は，日本の多くの美術館の現況，既往研究の状況，ならびに公刊されている美術館建築の計画・設計指針の内容や精度に照らして極めて大きいものがあり，得られた計画指標に関

わる数多くのデータ類とともに高く評価されてよかろう。

論考上の問題点としては，本研究が利用者側に対する直接的な調査・分析を欠いていることにあるが，この点は著者も今後の課題としているところであり，以後の取り組みに期待したい。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。